



「生徒と創る学びの情景」を描く裏表紙。インタビューでは生徒から「今まで言わなかったあの時の思い」が吐露されることがあります。

今号の取材の舞台裏。自己紹介の後、「こんな写真を撮ります!」と持参したバックナンバーを広げると、ある生徒が2024年6月号の特集「定期考査は必要か?」を手に取り、「攻めますね」と一言。話すつもりのエピソードと響き合うところがあったのでしよう。撮影の合間には食い入るように同号に目を走らせていました。石橋先生の叱咤を「定期考査のためのつけ焼き刃の勉強しかしてこなかった」と受け止めた、その生徒は話してくれました。その一言に胸が詰まり、私は次の問いをすぐに紡ぐことができませんでした。視界の端で、石橋先生が目頭を押さえたように見えました。

先生方向けの小誌ですが、教育に関心のあるすべての方のお役に立ちたいと、「高校版」も含め、多くのコンテンツをウェブサイトに掲載しています。あの生徒のまなざしに恥ずかしくない記事をつくり続けよう。学び舎を築立つ生徒の後ろ姿を見送り、心を新たにしました。(河野)

## 「可能性を伸ばす・開花させる」が今後の教育のキーワード

2月号の特集の課題整理の記事で神奈川県・私立横浜創英中学・高校の本間朋弘校長が語った教育課程の柔軟化の背景や同校の実践が大変参考になった。本県の教育振興基本計画の基本目標でも「一人一人を大切に、可能性を伸ばす」ことが掲げられており、「可能性を伸ばす・開花させる」が今後の教育のキーワードになると思った。また、「本特集を振り返って」の記事で示された教育課程編成のステップの中には、「ステップ1 学校の最上位目標を明確化する」とあり、その前提となる「育てたい生徒像」について、教師間で目線合わせをする重要性を改めて感じた。

栃木県立栃木高校 半田高史

## 「目の前の生徒に必要な学び」の視点を軸に検討したい

2月号の特集の記事を読み、学校のビジョンを構築し、それを土台として学校を持続的に発展させていく上での校長のリーダーシップのあり方や、ビジョンを全教師で共有し続けることの重要性を改めて認識することができた。また、事例1 群馬県立沼田高校の記事にあった「目の前の生徒に必要な学び」という視点から科目を設定する考え方は、教育課程編成の原点だと感じた。本校もその視点を軸に教育課程を検討していきたい。

静岡県立松崎高校 稲葉 渉

## 変革に向けた小さな動きをつくっていくヒントを得た

多様な生徒のニーズに応じた学校づくりは必要だと強く思うが、私も含め、日々の業務に追われて本来すべきことに力をかけられていないのが実情だ。教育課程の編成には校内の合意形成が不可欠であるが、それにかかる負担感は小さくない。しかし、2月号の特集の記事で紹介された様々な学校の具体的な実践から、いきなりは大きな変革はできなくても、そのきっかけとなる小さな動きを自らつくっていくためのヒントを得られた。まずは情報収集から始めたい。

新潟県立佐渡中等教育学校 竹田美代子

## 今春の卒業生から「30歳のレポート」を始めたい

勤務校では総合学科の特色を生かした魅力ある学校づくりについて頻りに議論されているが、その多くは3年間の授業での学びを軸としたものだ。そのため、2月号の「指導変革の軌跡」の記事を読み、大分県立日田三隈高校が取り組む、放課後の課外講座の「DC(ダイバーズ)講座」や卒業後を見据えた活動の「30歳のレポート」に興味を持った。特に「30歳のレポート」は今春の卒業生からでも始められる取り組みだ。早速、行動に移したい。

静岡県立富岳館高校 松浦恵太

## 高校卒業後を見通した教育活動の必要性を実感

2月号の新連載「シリーズ 高×大・専・社接続の視点で考える」の記事を読み、中央教育審議会が示した「知の総和」に関心を持つとともに、人口減少や生成AIの急速な普及といった社会の変化の中で、高校卒業後のキャリアに向けて生徒にどのような資質・能力を育成すべきかが理解できた。大学・専門学校・企業など、高校の先を見通して、高校だけに閉じこもることなく、外に開かれた教育活動を心がけていきたい。

東京都立調布南高校 徳武英人

VIEWnext

高校版 2026年7月号

7月21日発刊

(予定)